Akita University

第１章　研究の概要

研究主題　新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる

～学びの積み重ねの実践とゆるやかなネットワークの構築～

研究の概要

１　研究主題設定の理由

（１）過年度の研究成果

①「私の応援計画」（個別の教育支援計画）の活用

本校では，平成 29 年度から２か年「児童生徒主体の個別の教育支援計画『私の応援計画』を活用した教育課程の編成」を主題とした研究を行った。それまでの教育支援計画は，作成はするものの十分に活用されていないということから本人・保護者が主体となる教育支援計画の作成・活用を目指して研究を実践し，児童生徒主体の教育課程のプロセスを構築した。本人・保護者が主体という意味を込め，「私の応援計画」という名称にも変更した。また，本人と教師との対話を通して，夢や思いを描き，実現に向けて目標を可視化する取組を通し，児童生徒が学びの主体であることを自覚し，将来の夢や今何を学びたいかを語れるようになってきたことは，生涯にわたり成長し続けるための力を育む素地となると考える。

②「生涯学習力」を高める教育課程の編成

平成 31 年度から２か年「児童生徒の『生涯学習力』を高める教育課程の編成」を主題とした研究を行った。研究組織は，学部の垣根を超えたワーキンググループ（以下，ＷＧ）を作り研究を実践した。１年次は，基礎研究と位置付け，卒業生の学びの状況を調査する「リサーチ」，学校と結び付きのある教育資源を整理する「資源活用」，学び方の特性を意識した授業づくりをするマルチ知能とも呼ばれる「ＭＩ」のＷＧにおいて実践した。２年次は，教育課程の編成に向けて「私の応援計画」でも用いている「働く」「暮らす」「楽しむ」の三つのＷＧにおいて進めた。２か年の研究において，生涯学習を進める上で大切な要素や「生涯学習力」の定義付け，「生涯学習力」を高めるための教育課程の編成を行った。教育課程の編成においては，生涯学習の観点から「学びを積み重ねていくこと」や「地域と持続可能なネットワークを築いていくこと」，「児童生徒が継続的に将来の夢や学びたいことを表出していくこと」の大切さを確認した。

（２）社会の要請

平成 31 年「障害者の生涯学習の推進方策について」では，学校教育における学びと学校卒業後の学びを接続させ，生涯にわたって学び続けられるようにすることが重要と述べられた。また，Society5.0，人生 100 年時代と表されるように変化の激しい時代に突入していると言われており，学習指導要領においても，この時代において生涯にわたって能動的に学び続けることや，そのために教育において ICT を有効に活用していくことが求められている。

（３）本校の実態等

本校は，県の中心部に位置しており，多種多様な学びの場が学校の周辺に多くある恵まれた立地にある。学校としては，学部を超えた学習や実践が可能な規模である。また，大学の附属校として『生きる力　学びのその先』を見据えた研究を行っていこうとしている。

以上のことから，これまでの研究成果を基に，児童生徒がこれからの変化の激しい時代の中でも生涯にわたって学び続けるための力を身に付けてほしいと願い，本研究主題を設定した。

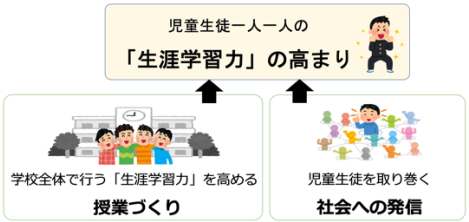
「生涯学習力」の定義

平成 31 年度からの研究において，本校として「生涯学習力」は，主体的にヒト・モノ・コトに関わり生涯にわたって学びに向かい成長しようとする力と定義付けた。

2　研究の目的と方法

本研究は２か年計画の研究である。研究目的は，児童生徒一人一人の「生涯学習力」を高めていくことである。

研究方法は，①学校として学びを積み重ねていくことを意識した「生涯学習力」を高める授業づくり，②研究の取組や授業での関わりを通して，児童生徒を取り巻く社会への生涯学習の価値の発信である。



3　研究の内容

過年度の研究を通して得られた生涯にわたり学び続けていくための重要な要素としては，「生活の中で，出会いや関わりがあること」，「ロールモデルの存在や夢・希望を描き，思いを表出する機会があること」，「自分の周りの人や物事に興味や関心や広げたり，物事や生活をよりよくしようとする気持ちをもったりすること」「自分の身近に学ぶ場があると知っていることや学びの情報とつながれること」，「地域社会が生涯学習の価値を理解していること」などが挙げられる（図１）。これらの要素を意識し，次の内容で研究を進めた。

図１　生涯にわたり学び続けていくための要素

（１）ワーキンググループによる研究

全校体制で「生涯学習力」を高めるために学びを積み重ねるための授業づくりや，ゆるやかなネットワークを構築するための基盤となる一年と位置付け，学部の枠を超えた授業づくりワーキンググループ」，「オリジナルマップ活用推進ワーキンググループ」，「地域とつながるワーキンググループ」を組織し，研究を進めた。また，授業づくりから情報を集めたり，ワーキンググループでの検討結果を授業づくりに生かしたりと往還的な関係をもたせた（図２）。

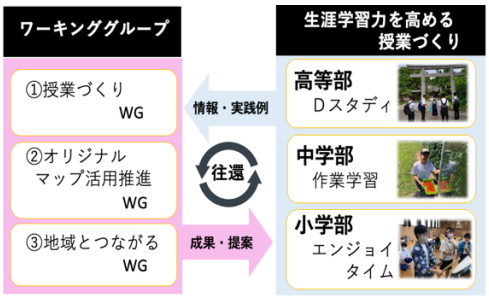


図２　研究組織

（２）各学部の授業づくり

対象の学習を選定し授業づくりを実践した。小学部は，昨年度の研究成果からスタートした児童の興味・関心を広げたり，好きなことを深めたりすることをねらいとした「エンジョイタイム」，中学部は，仲間との協働を通して得意な作業を見付けたり，作業能力を身に付けたり，責任をもって取り組んだりすることをねらった「作業学習」，高等部は，問題発見や問題解決の力や方法を身に付け，様々な場面で行動する力をねらった「Dスタディ」で実践した。

（３）「生涯学習力」を高めるための研修

児童生徒一人一人の「生涯学習力」を高めることを目指して，全校で講演を拝聴する機会を設定した。設定した講演と演題については，次のとおりである。

研修の機会	演題	講演者
夏のセミナー	「生涯学習力」を高めるために学校で積み重ねる学びについて	東京学芸大学 名誉教授　菅野　敦　様
公開研究協議会	生涯にわたって学び続ける子どもを育てる授業づくり	都留文科大学 准教授　堤　英俊　様

（４）研究成果等の発信

研究の内容や成果について，本校の夏のセミナー，公開研究協議会，ホームページ，研究紀要，キャリア発達支援研究会第９回年次大会（広島大会），『季刊「特別支援教育」第 84 号』，「共に学び，生きる共生社会コンファレンス関東甲信越ブロック」等で発信した。